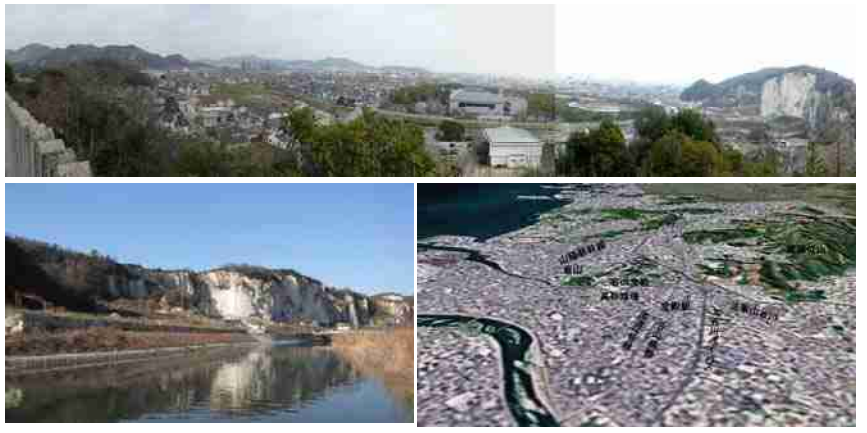


● 石の宝殿 & 生石の郷 の由来



1. 生石神社 社伝による石の宝殿の由来

**石の宝殿**  
 三方断崖に囲まれ、池中に石殿横たわる。古びた樹木が上部に生い茂っている。四方三間半の宮が三丈六尺、棟二丈六尺、高七丈七尺、日本三奇の一つで、御祭神の作と言ひ伝えられる。三奇とは塩釜神社の塩釜、番島山の天の逆鋒石の宝殿である。俗に浮石という。この浮くは石工の用いる言葉で、岩にひびが入る即ち割れ目の出来ることを意味している。即ち石宝殿と台石との間にひびが入っているの浮石という。

**沿筆** 大己貴神 少彦名神 天神の勅命で国土経営のため出雲から当地に立寄りになり、この宝殿山に飯宮を作つて御滞在された時、この石宝殿を刻まれた。工事中に天佐久売が火をつけて今麓の里で阿賀神が反乱を起している。二神に告げたので、石宝殿作りの工事は中止して今の神爪(神踏)で神爪の名称の起りという。諸神を集めて阿賀神を平定されたが石宝殿作りの工事は捨てられたので、未完成に終つた。この工事で住じた石屑は一里北の高御位山に捨てられた。高御位の北側に頂上から麓にかけて莫大な石屑が今尚あり、魚の鱗になつている。この附近には岩を切つたあとがたは全くない。

崇神天皇十三年に創建されて以来伊保庄平津荘の鎮守として崇められ孝徳天皇白雉五年千石の土地(現在の生石)神爪島の土地併せて千石を寄附されたのでこの三ヶ町は墓地といふ。生石は魚橋、神爪は岸、島は米田に墓地を作り、彦吉姓と稱していたので大いに栄えていたが天正年間豊臣秀吉の焼打ちに逢い、土地は没収、鐘は約鐘は分捕りされ、当社の宝物古文書は焼失し没落した。鐘は陣太鼓代りに使用した後、岐阜県大垣市赤坂町の安楽寺に寄附した。この鐘は大垣市の指定文化財となつている。鐘には播州石宝殿と寄進者の名が入つてゐる。荒井川にも御手洗川と稱し、神々が手を洗われたと伝えられ、泊は神々が御泊りになったのでとまりの名が由来だと伝えられ、今日の加古川市泊の名の起りといふ。

**石宝殿 生石神社**  
 大己貴神(生石大神) 大國主神といふ  
 少彦名神(高御位大神、栗島神ともいふ)  
 崇神天皇十三年申日  
 例祭十月十八日十九日 春祭四月十二日  
 神輿二体のからみ合せ十月十八日十九日  
 石ノ宝殿

2. 播磨風土記に記載された生石の郷

大國の里 土は中の中。大國とよぶわけは、百姓の家が多くここにたむろしていた。だから大國という。

この里に山があり、その山を伊保山という。仲哀天皇を神と奉り、神功皇后は石作連大来を連れて讃岐の国の羽若の地の石をお求めになられた。その地から海を渡って来られて、まだ御慮をお定めにならなかつたとき、大来が(絶好の地を)見出してみんなに知らせた。だから美保山という。

山の西に原がある。名を池之原という。原の中に池がある。だから池之原という。

原の南に石の造作物がある。

その形は家屋の如くで、長さは二丈、巾は一丈五尺で、高さも同様である。その名号を大石という。言い伝えによると、聖徳の王の御代に弓削大連(物部守屋)が作った石である。

